

## 死んで、生きる (2)

— キリスト者の罪に対する態度 —

【聖書箇所】 6 章 1～14 節

### はじめに

●前回、ローマ人への手紙 6 章から、キリスト者の生涯というのは、死んで生きる生涯であることを学びました。しかしこのことは、信仰が必要です。霊の目が開かれる必要があるのです。主イエス・キリストが十字架の上で成し遂げられた救いのわざは、どんなに強調しても強調しすぎることは決してありません。なぜなら、私たちはこのことを本当の意味で把握する必要があるからです。ローマ書 6 章において非常に特徴的なことばを見つけることができます。それは「**あなたがたは・・・知らないのですか。**」(3, 16 節)、「**私たちは・・・知っています。**」(6, 9 節)とあるように 4 回出てきます。いずれも「知る」ことの大切さを強調しています。ところで、私たちは果たして本当に知っているのでしょうか。それともまだ知らないのでしょうか。主が十字架の上ですでに成し遂げて下さったことについて、知恵と啓示の御霊の助けを通して、私たちが理解できるように助けていただけるように祈りたいと思います。

### 1. キリストとともに十字架につけられたという事実を知る必要性

●パウロが 6 章の中で「**私たちは・・・知っている**」と表現した聖句の中で、特に私たちは 6 節のみことばに目を留めたいと思います。

「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからたが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」

●6 節のみことばには大切な事実が記されています。それは「**私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられた**」という事実。あるいは 8 節の「**私たちがキリストとともに死んだ**」という事実です。過去の事実です。しかも一回的な、永久的、決定的な事実です。これは私たちの感覚的な、感情的なことではなく、聖書の啓示であることを心に留めなければなりません。5 章までは主イエス・キリストが「**私たちのため**」に何をしてくださったかが扱われました。5 章 8 節をご覧ください。

「しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが**私たちのために**死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、**・・・キリストの血**によって、義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」

●私たちはキリストの十字架の血によって罪が赦され、神の怒りから救われました。このことをキリスト

者であるならだれでも信じています。キリストの十字架の血潮は私たちを苦しめるすべての罪責感から解放します。ここで大切なことは、私たちの罪が赦されたということは、私たちの感情によるものではありません。キリストが私たちのために十字架でくださった事実に基づくものなのです。このことを私たちは聖書を通して知り、このことを信仰をもって受け入れたときに、私の罪は赦されたという確信が来るのです。神に愛されていることを知って、心に平安が与えられ、解放が与えられ、喜びを経験しました。しかしそのあと何度となく自分がしでかした罪を責めることがあります。そのたびに、「主よ。私が犯した罪を赦してください。」と祈るべきでしょうか。これは正しいことでしょうか。いいえ、自分の罪はキリストの血潮によってすべて処理され、赦されていることを信じ受け入れ、そのことを神に感謝すれば良いのです。神は言われます。

「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」

(イザヤ 43:25)

「わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。(イザヤ 44:22)

「東が西から遠く離れているように、私たちの背きの罪を遠く離される。」(詩篇 103:12)

●罪の赦しは、神が私たちのためにキリストを通してなしてくださったすばらしい救いの事実です。このことを知ることがキリスト者としての新しい生活の土台、救いの生活の土台となるのです。そしてまた、イエス・キリストが十字架にかけられ、死んで葬られて三日目に死人の中からよみがえられたことも、キリスト者であるなら、歴史的事実であることを知っています。では、これはどうでしょうか。キリストが十字架につけられたとき、あなたも私も、ともに十字架につけられて死んだ事実を知っているのでしょうか。キリストを信じるなら救われるということは、実はこのことも含まれているのですが、私たちの弱さのゆえに、このことに気づくまでに時を要するのです。

●繰り返しますが、5章においては、主イエス・キリストが私たちのために、私たちの罪を赦す(帳消しにする)ために死なれたことを記していますが、6章においては、私たちが新しい歩み、つまり罪にとどまることなく、罪の中に生きることなく、罪の奴隷となって生きることのない新しい歩みをするために、私たちは主イエス・キリストとともに十字架につけられ、死んで、そしてよみがえられたということです。

●ここで重要なことは、「ともに」(一緒に)ということです。キリストは私の身代わりとなって死んでくださったばかりではなく、私とともに死んでくださったのです。どちらも、聖書がそのように告げているのです。私たちの身代わりとしてのキリストの死を信じることができるならば、当然、私とともに死んでくださったキリストを信じることができるはずではないでしょうか。これは感情によるものではありません。私たちの罪が赦されたことを感じようと感じまいと、赦されたことは事実であると同様に、私自身がキリストとともに死んだことを感じようと感じまいと、私が死んだことは事実なのです。また、私たちの罪の赦しを感じなくても、その事実を信じたときにはじめて心に平安が来たように、私がキリストとともに死んだということを感じなくても、その事実を信じるなら、いのちにあって新しい歩みをするようになるのです。

【新改訳改訂第3版】Ⅱコリント書 5章 17節

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

●私の罪が神の前に赦され(神が忘れて下さり)、その罪に対する神の怒りから免れているそのような立場にあることを、私自身が認めたように、私の古き人(神に逆らい、神に反逆し、罪にとどまり、そしてその中に生きようとする傾向を持つ存在)はすでにキリストとともに、神の前においては死んでいることを、私たち自身が認めなければならないのです。「キリストにあって、新しく造られた者(すべての古きものは過ぎ去り、すべてが新しくなった者)として認めなければならないのです。そのとき、私たちは罪に対する態度が全く変わってしまうのです。

●6章7節を見てみましょう。

「死んでしまった者は、罪(の力)から解放されているのです。」・・・キリストの福音なのです。「キリストにある」ということが重要です。私たちの力とか努力によってではありません。自分で死ななければならないと考えているのなら、死ぬことはできません。自分を殺そう、自分に死のうと努力するのではなく、神がキリストにあって私たちをすでに処理して下さったことを知ることなのです。そして信じることなのです。「あなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。」(Ⅰコリント 1:30)とあるように、神が私たちを「キリストのうちに」、「キリストの中に」入れて下さったのです。

●ここに一枚の紙切れがあります。この紙切れを聖書の中にはさんだとします。それはこの聖書と全く別のものでした。たとえば、この聖書を誰かに貸すとします。ところで紙切れはどこへ行ったでしょうか。そうです。聖書を貸した人のところにあります。この聖書がもし火で燃やされたとしたらどうなるでしょうか。紙切れもともに焼かれてしまいます。この聖書がどこへ行こうと、紙切れも同じところに行きます。なぜなら、その紙切れは聖書の中にあるからです。・・・このように、あなたがたは神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。

●「キリストにある」ということは、キリストの死と復活においてキリストと同一視されたことを意味します。ですから、神は私たちが自分を十字架につけるようには要求していません。私たちは自分から十字架にかかることはできないからです。ただキリストが十字架につけられた時に、私たちもともに十字架につけられたのです。キリストが復活された時に、私たちもともに復活したのです。なぜなら、神が私たちがキリストにつないで下さったからです。このように、「キリストにあって」私たちが死に、そして復活しているということは、単なる思い込みではなく、神の永遠の事実なのです。

## 2. 神の永遠の事実を実際の生活の中で現わされる必要性

●私たちがキリストとともに十字架につけられたという事実は、私たちの生活の中において現わされる必要があります。この神の永遠の事実を知り、信じる人は、全く新しい世界観、人生観、価値観、あらゆる事柄における優先順位が変わるはずで、つまり、不信者と同じ轡(くひき)を負うことができなくなるはずで、それまでは、自分が自分を支配して生きてきましたが、キリストにある新しい歩み、つまり、キリストを自分の王としてともに歩むようになるのです。これが新しい歩みです。毎日、自覚的に、自分自身を主にささげ、主の声に聞き従って歩む生活がはじまるのです。

●地球の引力は現代の飛行機に対しては無効です。なぜなら、飛行機は地球の引力よりももっと強力な力をもっているからです。しかしそれを動かしている燃料が切れたときその飛行機はどうなるでしょうか。死んだ魚は川の流にそって流されていきます。なぜなら、いのちがないからです。流に逆らって進むためにはいのちが必要です。私たちキリスト者のうちにも罪の力は働きます。しかしうちに住んでくださるキリスト(キリストの霊)によって無力にされるのです。キリストによって生きる、キリストとともに生きる。毎日、自分自身がキリストのうちにあることを覚え、自分自身のからだをキリストにささげて、キリストの声に従って歩むとき、私たちは罪の流れに流されずに、それに逆らって歩むことが可能となるのです。このことが私たちの現実の生活の中に現わされなければなりません。パウロはそれを現実の生活の中で現わすために、13節において、あえて「あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。」と命じています。

1994.12.11